

日本の大学の美術教育には、理論的な学びが欠けている

●インタビュー
ウスビ・サコ 京都精華大学 学長

●1966年、マリ共和国生まれ。中国・南京東南大学で建築学を学び、1991年に来日。京都大学大学院博士課程修了(博士[工学])。2001年より京都精華大学人文学部教員。2018年4月、同大学長に就任。専門は建築学。著書に「知のリテラシー・文化」など。



京都精華大学のウスビ・サコ学長は、日本の大学で初となるアフリカ出身の学長だ。マリ出身で、中国の大学で学び、京都大学大学院で博士号を取得後、京都精華大学にやって来た。同大は日本で唯一のマンガ学部を設置するなど、芸術系学部を複数持つ総合大学として知られる。グローバルなバックグラウンドを持つサコ学長には、日本の大学の美術教育や高等教育はどう映っているのか？ お話を伺った。

伝統工芸と美術教育を混同している

——日本の大学の美術教育が技術の養成が中心になっていると指摘されていますが、本来はどうあるべきでしょうか？

サコ もともと職人がやるような仕事は「伝統工芸」と呼びますが、伝統工芸は社会に日常的にあるものだと思いますが、それが日本の大学に入ってきたとき、いわゆる「美術教育」と混同されたのではないかと思います。先生方は伝統工芸をリスペクト

していますが、リスペクトしているがゆえに、これをアカデミックなものとして見るということが起きたと思います。

その結果、美大や芸大では伝統工芸に近い形で技術を極めることが重視されるようになりました。でも、大学における美術教育というのは、作品を作るだけではなく、作品を見たり、批評したり、作品のコンセプトを考えることが重要で、そのために美術史や哲学など理論的な知識が必要になってきます。それが行われないことが多いのが残念です。学生は技術がうまく、うまくないかで評価してしまうと、おかしなことになると思います。

——職人(アルティザン)と芸術家(アーティスト)が大学教育で混同されているんですね。

サコ 本当に職人的なものを作ろうと思ったら、中学や高校を出てすぐに工房やアトリエに入ったほうがいいです。大学では、時間も限られているので、職人のようには技術を極められません。でも「作品」という意

味では、コンセプトチュアルなものを作ったりすることができません。だから、美大や芸大を卒業しても、美術の勉強を続けられないのです。

——大学の卒業生の進路を見ると、よほどユニークな発想やセンスを持っている人であれば作品を作り続けられますが、50%以上は一般企業に就職しています。それでしたら、美術の理論的な枠組みをきちんと勉強すべきではないかと思えます。

——学長就任と共に京都精華大学で発表したビジョンには「リベラルアーツ」「表現」「グローバル」の3本柱を打ち出していますが、芸術においても「リベラルアーツ」が重要ですか？

サコ リベラルアーツを学ぶこととは重要です。人間社会や私たちが歩んできた歴史を理解することによって、その作品を見る人の視点が見えてくるかもしれないし、作品との対話ができるかもしれません。作品の周辺の知識や教養がなかったら、何も語ることができないでしょう。

芸術活動をする人は何も無いところからモノを生み出すことができるかもしれない。それはすぐに役立つ実用的なものとは違うかもしれませんが、自分が持っている感覚や気持ちを相手に伝えることができます。教養がないと、単に作っただけになり、何も伝えるものがない作品になってしまいます。

——3本柱の1つ、「グローバル」については、どのように考えていますか？

サコ これは多様性ともつながります。「グローバル」というとき一番重要なことは、「国」が先に来ないことです。つまり、国と国の関係である国際化ではなく、個と個がいろいろな空間を越えてつながり、尊重し合うことが重要です。

経済的グローバルは、マスカルチャー推奨なので、みんなを同化させていきます。でも、私が考えるグローバルは、まずローカルから始まるんです。

自分の足元をしっかり見つけ、自分や自分の社会をしっかり知り、相手の社会との違いがわか

る。その上で、お互いに認め合い、一緒に何かをします。だから、お互いに違っていても当たり前で、その違いを尊重し合うことがグローバルの始まりだと思っています。

——自分のことがわからなければ、相手のこともわからないということですね？

サコ 国外の人と会って、国外のことを勉強することも大事だけど、それよりも自分を再確認することが大事ですね。相手の文化を通して、自分をもう一度見つめ直したり、あるいは自分の価値観をきちんと確立していく。だから、異文化のなかで自分がさらに見えてくるということを含めてのグローバルです。

英語ができる、アメリカのことしか知らない、というのはグローバルではありません。単なる流されている人です。そうではなく、自分の立ち位置を持った「流されないグローバル人材」をきちんと教育していくことが重要だと思います。

自分の立ち位置を持てれば、協調性が出るし、国外の人と一

緒にコラボレーションできると思っています。これまで「グローバル教育」「英語がしゃべれる」とされてきましたが、違います。留学するにしても、相手の文化や社会を理解するとともに、自分自身を理解し、自分を確立していくことにつながらなければ意味がないと思います。

——京都精華大学では、AO入試や一般入試などを留学生にもオープンにしていますが、この狙いは何ですか？

サコ 日本の大学では、日本人や国内の学生とは別に留学生入試を設けているのが一般的です。それを見ていると、例えば、留

学生を200名欲しいとなると、試験の成績順で200名取るものになっていきます。しかし、本学の入試ではそのような区別をしません。

さまざまな奨学金制度で決まる留学生特有の入試はありますが、それ以外の入試は全てオープンにして、留学生も日本人や国内の学生と同じ土俵で競争することを2年前から行っています。過去2回の入試を見てみると、小論文試験や学科試験のトップが留学生ということが起きています。だから、国語でさえ留学生のほうが上ということがあ



大学にとってのメリットは、日本語のレベルの低い留学生を入れるのではなく、ある程度、日本語の面でも国内の学生と試験しても残れるようなやる気のある留学生を入れることができます。

そのような多様な留学生が入り、学内の雰囲気も変わりました。留学生はすぐくやる気があり、彼らが引く張つていく存在になっていきます。逆に、彼らにとって物足りなくならないかを心配しています。

——日本の高等教育全体を見ていて感じる課題はありますか？

サコ 自立した学生を育成してほしいなと思います。社会もそうだし、国もそうですけど、評価の基準が個を自立させないシステムになっていると思います。だいたい方針が決められたら、その方針通りに物事が動くというのが問題だと思います。

例えば、人生100年あるとすれば、1年くらい冒険してもいいと思うんですけど、今のシステムでは、それをやったら、何を言われるかわからないこと

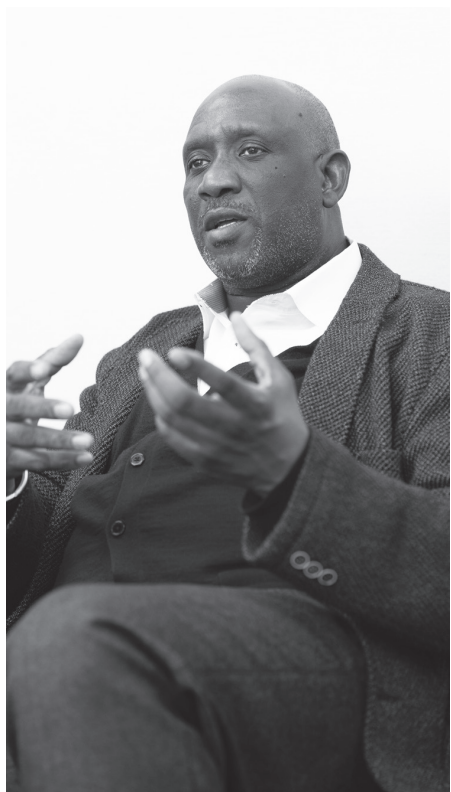
になっています。

日本の教育で変えなければいけないのは、学生のうちにいろいろなものを吸収して、失敗も含めて学生しかできない経験をもっとさせることだと思います。それによって、ずっとやりたいと思える仕事に出会えるかもしれない。それが将来、形が変わってもいいですけど、納得した上で社会人になることが重要だと思います。大学はそのチャンスを与えないといけないと思います。

——大学4年で卒業して一斉に就職するのも日本だけですね？

サコ それも大学がさまざまな指標で評価されているからです。大学改革に対するさまざまな総合支援や補助を決めるときの指標に、就職率・休退学率・定員充足率の3つが用いられます。

大学もこれらの管理指標に対して、高い就職率を目指します。例えば、就職率90%といつても、そのうち何割かは不本意に就職しています。自分のためではなく、家族のため、大学のために就職しているかもしれない。



休退学も本人の権利だと思います。本学では、休学してどこかに行くことは良いこととして、休学中の学費をかなり安く設定しています。

世間から見ると、管理指標が悪いと大学ではないとなつてしまします。でも、これほど進学率が高くなり、少子化である日本は、大学のあり方を見直すべきだと思います。例えば、どれだけボランティアをやっているか、どれだけ好きなことができているか、など管理指標の方針を変えたいと思います。これから大学無償化が始まりますけど、無償化支援を維持す

るには成績を落とせないの、学生たちにはプレッシャーがかかります。今の制度では、エリートの育成になってしましますが、実際に官僚のような仕事に就く人は少ないです。学生がもっと広い視野を持てるように、教育のチャンスを与えたいと思います。

高校と大学の距離をもっと近づけたい

——京都精華大学では、2021年度に2学部を新設します。まず、国際文化学部はどのような特色がありますか？

サコ 国際文化学部は人文学部

を改組してできます。人文学部は1989年にできて以来、国内外でフィールドワークをやったり、学生が好きなことを自由にできる学部でした。外部から見えて体系化されてはいないけれど、それだけに学生たちは自立してリーダーシップを発揮していました。

ところが、文科省の教育内容などに対する管理システムが厳格化するなかで、ある程度学生の裁量に任せられていたフィールドワークの選択と実施方法などの人文学部の良さや一部の教育内容が削られていきました。私が2013年に人文学部長になってからは、管理を入れつつ、単位にはならない一部で放任主義も残し、半年間はオフキャンパスといって、それぞれのテーマにそって国内外でフィールドスタディーズをさせることにしました。

アジアやアフリカの文化、共生社会、グローバル関係などを研究するグローバルスタディーズ学科を設けます。従来通り半年間ほどのオフキャンパスも行います。

——メディア表現学部はどのような特色がありますか？

サコ 従来のポピュラーカルチャー学部では、音楽とファッションをやっていたんですが、大学でポピュラー音楽をやる意義が見えにくいという問題がありました。そこで、大学での音楽の位置付けを見直すなかで、音楽表現に限らず、イメージ表現などモノを伝えるメディアが増えていることから、さまざまなメディアとコンテンツに関する幅広い知識を学ぶ学部としました。

学内の他の学部ともコラボレーションします。例えば、マンガ学部はコンテンツは作るけど、コンテンツを乗せるメディアはないので、そのプラットフォーム作りなどを考えます。小学校からプログラミング学習が始まりますが、そのプログラミングの技術を生かすこともできるの

で、ある意味、時代の要請に応えた学部となります。

1つ認識してほしいことは、日本は既存のインフラが整っていることから、情報技術の活用が遅れていることです。インフラが整っていない国では、いきなりフロググジャンプして、情報技術の活用が進んでいます。もっと国外を見てもらって、日本が遅れていることに気づいて、逆に日本を盛り上げていく必要があります。

——同じく21年度から始まる学部横断型学位プログラム「人間環境デザインプログラム」はどのようなものですか？

サコ 半分以上、私の思いが入っているんですけど、これは建築の分野に位置付けられます。建築のなかにありながら、従来の学問領域に捉われず、5学部の領域を横断的に学び、コミュニティや過疎地などの再生やデザインを考えていきます。

——最後に高校の先生方へのメッセージをお願いします。

サコ 高校は、もっと大学を利用していただいたいと思います。高大接続のなかで、高校生でありながら大学の授業を経験したり、場合によっては先に単位を取ってもいいのではないかと思います。あるいは高校と大学と一緒に授業や連携プログラムをやっていくことで、両者の距離をもっと近づけたほうがいいと思います。そうすることで高校生のやる気が出ますし、進路に結びつくような新たな発見も得られるのではないかと思います。(取材・構成／沢辺有司)